深き歴史、重き伝統

脈々と受け継がれてきた約２４０年の歩み

木山初市百話

初市の誕生は大昔のこと

さかのぼること、なんと徳川時代。税収の基本である米を作る農民をどのように統制するかが、徳川幕府の大きな課題でした。生活が豊かになった農民たちが米作りから遠ざかることを恐れた幕府は、さまざまな規制で農民の生活を抑えつけました。その規制の一つに、「商いができる場所」を限定するというものがありました。農民を貨幣経済から遠ざけるために作られた規制です。商いをしてもよいという商業上の特権を与えられた町を准町（じゅんまち）、それ以外の田舎の市街地は在町（ざいまち）と呼ばれました。在町では商いをすることができず、木山はこの在町に位置しました。在町では、村に商人が入ったり、現在の移動販売にあたる「振れ売り」さえも禁止にされました。これにより農民たちは自給自足で最低の生活を強制されました。

ですが、時代が進むとともに生活用品の需要が増え、それを満たすために「商品と開催日の制限付き」で商いが許されることに。これが現在開催されている木山初市の原型となる市で、農民たちはこの機会に日用品や鋤・鍬などの農具を購入しました。宝暦７（1757）年ごろの「肥後国中手鑑」という書物によると、初市は約 240 年も昔から開かれていることになります。始まった当時は「六斎市」と呼ばれ、毎月６回、特定の日に開かれる定期市でした。その六斎市が時代の変化に併せて時期を変え、姿を変えて今に続いているのです。

木山の繁栄と市だご

当時、物資の運搬は人力か牛・馬でしたので一日の行動範囲はその歩行距離で決まりました。そしてそれがそのまま当時の文化圏、経済圏を築きました。木山はこの近郊の文化、経済の中心地だったそうで、「馬の糞町」と呼ばれていました。これは物資を運ぶ牛や馬が多く集まったことから呼ばれるようになり、木山の繁栄の証とも言えます。

昭和に入ると嫁入り道具は全部木山で揃うほどでした。昭和 30 年代初期までの初市の賑わいはまるで満員電車に乗った時のように、人の肩と肩が触れ合い、一度人混みに紛れこんだら前にしか進めないほどの賑わいでした。木山交差点から眺めると道いっぱいに見えるのは、人の頭ばかりだったそうです。老若男女、大勢が初市に訪れ、辺り一帯を巻き込んだ一年に一度の祭りでした。この時のお客さんを「市客」といい、その市客をもてなすために振る舞われる最高のごちそうが「市だご」でした。この団子を初市で食べて、人々は春の訪れを実感しました。

ちなみに市にはそれぞれ愛称があったそうです。隣町の御船は「芋市」、大津は「飴市」と呼ばれていました。木山初市は「団子市（ダゴ市）」と呼ばれ、親しまれていました。